

会報



屋も夜も写せる 使いやすい高感度

細かく しかもきれいに撮った粒状性

絞やシャッターが狂つてもよく写る寛容度

ハイライトからシヤドウまで 克明に仕上げる美しい調子

現像を押すとグンと上る感度

さくらフィルム

コニカ SS

2 2

八木治(6)

佐藤 浄(12)

16

小林国治……(11)



岩科小一郎

山が写っているということが山岳写真ならば、富士山など

プ、即ち日本山岳会の創立に参与した人々ぐらいのものである。それに若干の外人登山家、それにはウエストンという大物がいるが、ウエストンは写真を撮らなかつたように思う。彼の

冷房のきくホールで観賞する事が出来るのですから、昨午の
とは云え、誠にパチの当る様なゼイタクな話で御座います。

(1)

予 告 欄

第五回『山岳映画傑作の夕』

日 時 昭和三十一年十一月十四日(水) 午後五時三〇分 開 場

場 所 千代田区公会堂

会 員 券 九〇円

プ ロ プ ラ ム

換 拶

一、氷の宮殿雲龍峽	塚 本 会 長
二、中部国立公園 朝日連峰	酒 井 菊 雄
三、雪の祭典 一九五六年度	中 野 峻 陽
四、東北の行事	福 原 健 司
五、岩氷の鳥海山	今 泉 正 路
後 援	塚 本 閣 治
	明治生命保険会社 東京山岳連盟
	山と溪谷社

『冬山とスキー写真展』

日 時 十二月十一日～十六日(六日間)
場 所 銀座 小西六ギャラリー

幻 燈 時 代

大 森 三 郎

今秋から小西六を始め、キヤノン、アルコ等のメーカーが、8ミリのシネ撮影機を一せいに発売するそうですから、山の世界にも今迄の白黒や、カラーの普通写真から、動く写真が大衆化して来ることが目に見える様です。

山の小型映画と云えば二十余年来、塚本会長や酒井菊雄さん等で、戦前から登山大衆の血をわかつて来たものですが、戦後は更に福原さんとか、三成さん等本会々員の外、数名の人々が家業をそっちのけにして(?)活躍していることは御承知の通りで、観賞する側よりも制作する人達の方が大分楽しんでる様で御座います。

この人達の制作意欲は、対照が大自然の山であるにも依りますが、何れも素人であると云うことが、作品の巧拙は別として山の奥深い自然美を純粋な気持ちで良く表現しておりますし、観賞する側から申しますと、一度訪れた山の映画は、当人の回想の対照となりますし、未知の山の映画でしたら、今後出かける登山の予備知識を得る上にこれ程素晴らしい生きた登山案内は又とないでありましょう。

山岳映画会ブームとか云われておりますが故なるかなと存じます。

ところで、戦前、戦後を通じて山岳映画会のこれ程盛んでない三十五・六年前はどうであったかと申しますと、今の動く写真に對して幻燈と云う世にも懐かしいものが存在しておりました。これも只今のカラースライドの類でなく、幻燈板と申します手札型位のガラス板に、その当時横浜に一軒きりしかなかったと云う着色専門の店で

明治三十七年八月撮影とある。

志村氏の白馬行の作品は『山岳』創刊号にも掲載されてあり、年月は失念したが、三十九年頃に四ツ切判六枚を貼入した画集二冊を出版している(この画集の名も失念)。私が山岳圖書の研究にうき身をやつしていた頃、志村氏からこの画集を贈られ、日本最初の山岳画集として愛蔵していた。この画集の刊行がきっかけで、日本山岳会から『高山深谷』という、密着焼を台紙に貼り貼入した写真集が年刊で出された、たしか明治四十二年から大正五年頃までの八回と思うが、資料が手元になく正確にはいえない。一回二十部製作だったと思うから全揃で持てば珍品である。(梓書房刊の同名の画集はその後をうけたもの『高山深谷』の由来はそれに鳥水氏が書いています) だんだん話が長くなりそうだから、こゝらで切り上げることにして、日本の山岳写真の歴史は一応明治三十七年の線が出た、これを何年遡る記録が出るかが第一の問題、それから、明治時代の山岳写真家告知板を作って、先輩の労にむくいたいというのが第二の問題、第三には作品を複製して山岳写真画史をつくる。

この三つを私は山岳写真協会の仕事として差し上げたいと思う。幸に志村氏は健在だし、古い『山岳』誌上に優秀な作品を発表し続けていた高野鷹蔵氏も健在、その他、明治登山史の生証人はまだまだ何人も健在である。その人達から自著に使った写真の撮影者について語ってもらうことも有意義であらうと思える。

加工致しましたものを映写して見せたもので御座います。

申し忘れましたが、その大正の世の幻燈時代とも云うべき山の会は、日本山岳会の年一回の総会の折の発表会で御座いまして、私の記憶では冠松次郎さんの黒部峡谷とか、沼井鉄太郎さんの朝日連峰縦走とかの類で、当時と致しましては、正に探検時代のことと御座いまして、今でこそ軌道がアゾ原迄通じていたり、二百米のエレベーターがあったりしておりますが、大正初期、冠さんが数日となく入映して探検し、その壮事を、色のついた、うつる写真で御本人の冠さんから直々話を聞くのですから日本山岳会員たらずともこれを逃しては一大事とばかり、脇をワク／＼させて芝高輪の、なんとか堂とか云う貸席へ、まだ明るい内からかけつけて、講演の始まるのを今か、今かと待ちかまえた気持は、今だに想い出す心良い品奮で御座います。

山の講演会とか、集会とか云えば日本山岳会のそれしかありませんでしたが、大正の末期になって、粕谷助次郎と云う人が突然現れまして残雪期の鳥帽子——槍とか、後立山縦走を活動写真に致しまして発表されたもので御座います。粕谷氏の映画には、有明の中山と云う遭難死した案内が、初めて小槍に登ったのを、こく明に撮影されましたし、後立山のハッ峰の険をロープを張り渡して大量の荷物を運搬した光景等が、今だにマザン／＼と眼に残っております。

とに角、今日の山岳映画ブームの先駆とも云うべきものですが、この映画を東京で初めて公開したのは、東京野歩路会です、この会は山岳映画会のハシリをうけもったものと云えませう。

私の少年時代は胸をはずまして、山の幻燈を見に行ったのですが、今の人達は立派に編集された総天然色の映画を美しい伴奏で、冷房のきくホールで観賞する事が出来るのですから時代のへだたりとは云え、誠にバチの当る様なゼイタクな話で御座います。



釣り写真

永田 一脩

山岳写真にかぎったことではなく、一般的にいつても写真と釣りは両立しない。釣りも写真も同じでいどの腕前だとして、写真撮影している時と、釣りをしている時と、どっちが面白いかというと、それは比較にならないほど、釣りの方が面白い。それで釣りの写真をとろうと思って、釣りの場に写真機を持っても、よほどの決心がないと釣りに夢中になって、写真はとらないで帰ってくる人が多い。

登山と写真とはこんなことはないが、釣りと写真では、どうしてかと考えてみると、釣りという奴は遊びでスポーツなのだが、写真を撮影することは製作で、そこには遊びの要素は少いからだといは考える。

それはそれとして私は戦前は山と写真だったが、戦後は釣

りと写真になってしまった。そして今ではその釣りを山の釣りにまで高度を上げようとしている。

今年には利根川源流の宝川に四月に行き、六月に尾瀬に行った。尾瀬では釣をする時間がなくて、日中二時間竿をおろしたが、魚は見えていて釣れなかった。ただイワナのいることと尾瀬のイワナの生態を知ることができた。

釣りをしていると、自然溪流が相手になってくるので、山に登っていた時代に尾根歩きばかりやっていた私は、最近溪流の美しさを写真で表現してみたいという慾望をもつようになつてきた。しかし、まだ溪谷らしい溪谷には入っていないし、同時に写真もできていない。それで、あまり慾ばらずに上越あたりの溪谷から始めて、次第に南北アルプスにおよぼうと思つてゐる。

三年以来、私は野呂川を両又まで、ゆっくり釣り登りながら写真もとうろと思つてゐるのだが、金と時間のない私は、今年も実行できなかった。も一つ行つてみたいのは黒部の中廊下、平ノ小屋のあたりである。

なんとかして、釣りと写真の二道歩きをする私には、常に相当な無理があるのだが、それを精神的に解決することは時間があればできるのではないかと思つてゐる。(一九五六・九)

雪まじりの風が大分窓を打つ、毛布を三枚もかけても寒い、一夜中ストーブの番をするのだと云ふ一行中の一番年配のSはストーブの傍に長椅子を持って行つて横になつてゐる。

長年の山での生活は彼をしてこれでも充分睡眠をとれるだけの習慣を積んでゐるのであらう。

これは三月中旬の家形山の小屋での話である。如何に東北でも三月中旬は山麓には梅の花の咲く頃と云ふのに今夜の寒気は何んといふ事だ。神経が高ぶつて雪やスキーが脳裏に走馬灯の様に走り去る。私は撮影の前夜は常にこうして眠れぬ夜をくりかへす。今さらSが羨ましい。昨夜の寒気と風のために雪面がテカ／＼に光つてゐる、家形山の斜面を登るにしてもスキーでやつと、ましてアイゼン無しでは想像も及ばない。逆光線で登り行くスキーヤーの影の美しい事、登りも良いがこの斜面の滑降を撮影出来たら面白いであらう……と私は五色沼の見える少々手前のほとんど稜線に近い附近から一行に滑つて貰ふ事にした。滑るにしてもカチ／＼に氷つていてスキーのエッジもさかぬ程の氷の如き雪面、私は無理とは思つたがこうした機会は二度と無いとばかりに、無慮にも私はスキーをぬいだ、シネカメラは一番安いイーストマンのK型、こうした場合手持より他に無いとばかりカメラボデジョンをさめ様と思つたがカメラが近い。一行にもつと遠くに離れて貰えば良いものを悪いと思つて私は其ま、後すきり五六歩……。

其時あつと云ふ間に転落、家形山の太斜面をあれよくと云ふ間に私の体は走つて行く、其長かつた事、最初にはカメラを持っていたが、途中から手離して極力両手で雪面を摩擦して止め様と思つたが駄目。足を下にしたものか頭を下にしたものか多少考へる余有はあ

カメラと共に200米

酒井 菊雄

つたにしても結局頭を下にして二百米は落下したであらう。幸ひ下降の平端と軟い小枝の雑木は私の生命をくい止めて呉れた。

其割に怪我をしなかつたのも岩が無つたからである。カメラはと見れば蓋は開きフィルムが臓腑のように長く雪面に広が其ま、主人の後を落ちて来たのであらう私のすぐ目の前にあるでは無いか。レンズの前には雪が圧縮されて一杯つまりもう到底役には立たない様子である。

この事はつまりスキーの限界を離れずでにピッケルとアイゼンの限界に達しているにもか、わらず無慮な撮影の結果である。写される人もさうであるが、写す人として其辺の注意は意つては成らない。これは先ず私の近來での失敗である。カメラは早速帰京して種々のテストをしてみた処私の体と同様何等異状無し以後この古い弁当箱みたいなカメラは一生私から離す事は出来ないであらう。

傑作
を生み出す鍵

さくらフィルム



毎年夏になると必ずどこからか、山の写真の撮り方だの夏山の写真だのを頼まれる、冬になれば冬山とスキーだ。頼まれると厭とは云へない損は性分と云ふことは先様の方が余程よく知って居ると見えて、断り切れない様に話を持ちかけて来る。昼は仕事に追まわられ、夜は写真の例会の先生に毎晩の様に座敷が、つて居るのに、この上夜中に原稿とあつては、まるつきり寝て居るひまがない。

戦前の登山とスキーにはよく写真や原稿を頼まれては書いたものだが、もう二十年以上にもなる古い話だ。その時はアマチュアだったから原稿料を一銭も貰はなくとも喜んで写真を書いて居た。やはり自分の写真が印刷になり、書いたものが活字になることは嬉しかった。この純情な気持は今はどこへ行つてしまったのだらう。

写真で飯を食ふ様になつてからは一本のフィルム、一枚の印画紙、一枚の原稿も直接生活に響いて来ると云ふ現実を忘れることが出来なくなった。山が好きだからと云つて道楽で山登りが出来なくなった。時間と金と労力をかけて売れる写真を撮りに行くとなると楽しいなどは云つて居られない。一枚一枚に全精神を集中してシャッターを切らなくてはよい写真が出来ない。一回山へ行くたびに数百枚の写真の撮つて来るが、その中使へる写真が何枚あるだらう。全く神経がすり減つてしまふ。

この血のにじむ様な結晶を山の雑誌屋に申合せた様にいと氣輕に拝借と来る。しかも只みたいな原稿料で。しかも払つて呉れるのはまだよい方だ、中には黙つて居ると何時まで、でも知らん顔をして居る雑誌屋が居るからひどいものだ。定価をつけて本屋で売つて居るのなら原稿料を払ふのが当り前だと思ふが、こつちは

人に喰はれた話

八木 治

写真や原稿を書いて税金を引かれた上に又税金を取めて居るのだから、泥棒に追銭みたいなものだ。

今まで随分と色々な新誌や新聞に原稿や写真を出して居るが山の関係の雑誌が一番非常識な様だ。もつともこれは雑誌屋ばかりの責任とは云へない、寄稿する方の側にも罪がある。只でもいから自分の写真や原稿を載せて貰ひたいと云ふ売名的な存在がまだ可成りある様だ。頼まれて書いたのなら当然の報酬として原稿料は請求すべきなのにまあ、ですすやなどと思得る馬鹿も居る様だ。

こんなことをして居るから雑誌屋の方ではいいことにして何んでも人のふんどしで相撲をとることばかり考へる様になる。

広告を一杯取つて只みたいな写真や原稿を使つて高い値段で売つたのでは山の雑誌屋をやり出した止められない譯だ。その証拠にあとからあとと山の雑誌が創刊されて居るではないか。

もつともこんなやり方をして居るからよい写真は集まらない、実のある原稿が載せられない、どれもこれも内容が貧弱だ。金をかけずによいものが出来る譯がない。何時まで山の雑誌ブームがつまつかうかが見ものだ。

散々悪態をついたが、おそらくこれは私一人の憤憤ではあるまい。

「山や」は皆人がよい。しかし相手に利用されつばなしでは人がよいではすまされまい。

忙しい時間を裂いてまで商売人に只儲けさせる法はあるまい。人に喰はれるにも程があると云ふもの。岳人であり写真家である誇りを堅持しやうではないか。

東海道の南アルプス

船越好文

箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川——と云う大井川、それは南アルプス白根三山に源を発し、延々百四十軒余り南に流れて駿河湾に注ぐ大河である。もつとも、この越すに越されぬは大きな川である所以よりも、徳川氏が大江戸防衛の為に架橋を禁じた事に出発して居るらしい。そして品田・金谷間を運台や人夫の肩車で、無理に渡河させたことが、時に越すに越されぬだったのだ。

この金谷を起点とする大井川沿いの大井川鉄道も今や電化が完成して、この方面よりの南アルプス登山もめんどろがなくなった。そして上流の寸又川が観光静岡の十景と云うのに首位当選し、南黒部峠と名乗つてその溪谷美を誇っている。又来年度の国体登山部門の目標として光岳から聖山のコースが一応決定し、土地の人達も大いに張切つてその時を待つて居つたことだった。

終点千頭で下車すると間もなく大井川が大きく二つに岐れよう。右が本流として、赤石

岳や聖岳に直接登るにはその方を廻つて行かねばならない。左が寸又川、そしてこの辺から二十軒位廻る間を寸又岐と呼び、所謂奇岩怪石の溪谷なのである。立派なトロッコ路があるし、光岳へはこのコースをとるのが普通である。いつかこの立派な道も小道となり、徒渉を重ね、急な山路を喘ぎ喘ぎ登れば国境尾根に取付く。と間もなく光岳——テカリ岳が目に入るだろう。テカリ、それは山頂下の巨岩が周囲の森林の深緑を破つて、朝な、夕な、陽の光でテカリ出すことから来て居ること、そんな譯で光岳一帯は山頂あたりまで緑でお、われている。しかし南アルプス南端の山としての貫録、それはこの山が遠松の南限と云うことでも領けよう。

山頂二五九一米からの眺め、それは北アルプスの山の頂きからのように、山小屋なり、人里なりを指摘出来るのとは違って、文字通り深山の感じてほんとに嬉しい。南アルプスの山として南方の眺望は物足りないとしても、東は富士から始つて、赤石山脈の山々、西の方は中央アルプスから御岳、遠く北アルプスが見えるのである。光岳に山小屋が出来た。附近一帯は、遠松と岳樺に彩られた高原的な所。光岳から北にこの山脈を縦走するとしよう。密林中を辿る山道ではあるし、時に消えか、ったりするも仕方がない。獵師路とも交

さくするし、寧ろ大きい獣道の方に危く入つて見たり、い、加減神経を使う。それだけに深山の感じがひし／＼と身に迫る思がする。易老岳、仁田岳と越して仁田池に来ると、今迄水場らしい水場がなかっただけに、直ぐにでもゴクリやりたいたのだが、色がついて居つてその儘では飲料にならない。何しろあたり一帯は羚羊や鹿の遊び場として、彼等にとつては大切な水場だ。池畔の湿地には足跡が乱れ、獸毛も散乱してノタ打ち廻つた跡も見られる。

茶臼岳から小一時間も下ると地図にあるお花畑に出る。何もこ、だけが花畑ではないのだが、名付けられただけの貫録はある。ウツクシキヤ、イワカガミ、トリカブトなどが咲き乱れている。

上河内岳を下り切つて縦走コースから一寸左に降りて右に折れると聖平露营地。今はこゝにも小舎が出来た。聖沢源頭であり、モミ、ツガ等の巨木に囲われたこの地は山旅の一夜を送るに相応しいところ。

聖岳は三千米級の最南の山、奥聖を経て大井川に急降下出来るのだが踏跡がや、明瞭を欠く。縦走コースは西の方、兎岳、中盛岳、大沢岳と々々と廻つて百間平から赤石岳へ。こゝから大井川には東山稜を通つて樺島に下ることになる。

山小屋の憶ひ出

古谷 正次郎

最近の登山熱はものすごく、七八月の季節はとうてい寄り付かない程である。やっと山小屋に着いてやれ／＼と思う間もなく、この山小屋が一と苦勞である。後から／＼とおしにかけてきたちまちま満員、もう心の中ではもうこれ以上来てはどうなることかと心配していてもまだ／＼おしかけてきて超満員、夕食もやつの思いで済ましていざ寝る段となるとこれがまた大変だ、畳一枚に二人半の割合と云ったこみ具合で、全く動きもとれない。そればかりかそちこちでが／＼べちゃ／＼と話し声でなか／＼寝れそうもないので閉口してしていると、流石に夜半となると静まって一と眠りしかたと思ふと早出組が起き出して話し出す、時計を見ると午前四時だ。こんな始末であるから、僕の友人などは八千円も出した靴を失敬されては大変と靴紐を首に結びつけて寝たと云うエピソードもある。全く気がでない山小屋になった。これが昔の山小屋である全く吾気、たのしいものであった昔の山小屋——今から三十年前から戦前ま

での話しであるが、山小屋に漬くとリユクサツクを小屋に置いてカメラを持出してしばらくあたりの景色をたのしみながら撮影して帰ってくるのそばで夕食の仕度をする小屋の人達と一所によもやまの話などして、全く下界の俗念を去つて無我の境に入る実にはのしい時であった。私は山小屋の生活がすきである。それはあらゆる俗界のことを忘れるばかりでなく、こんな平等な処があるであらうか、山小屋に泊っている人はどんな権力者であるが、どんな職業の人であらうが、ここでは皆同一にかたり全く同等であるからである。そして共に山をかたり自然を愛することが出るからである。月が出れば皆で月をながめながらウイスキーを飲み、望遠鏡を取っては、あの山の谷をかたり合う、丸で十年の知己の様である。それなのにお互は名も知らない今宵一夜の泊り合せに過ぎないのであるが、山の友として実になつかしいものであった。こうした昔の山小屋を知る人にとつては今の山小屋はまことに苦痛である。

針ノ木峠越え立山。このコースもよくやつた。大沢小屋で一と休み、いよいよ針木の雪溪にかかるが、この小屋も水の豊富な小屋で寛などもあって方丈記に出てきそうななつかしい小屋であった。峠を越して、針ノ木沢を下り黒部の吊橋を渡ると平の小屋である。この小屋もなつかしい思い出が多い。この名物は岩魚の塩焼と能登の新芽のゴマ合と云ったまことにうれしい山の幸を出してくれたものであったが、今日の様に大勢ではどうにもならないであらう。ここから刈安峠を経て五色の小屋であるが、ここでは兎の肉をよく出してくれた。又アザミの味噌汁もなか／＼の風味であった。月夜の晩などこの原に立って見えた針木岳など全く忘れられないものであった。立山の縦走は何の危険もない雄大な眺めをたのしみながら剣御前小屋に着く。此の小屋では岩苔の三杯酢を出してくれた。これは珍らしく、味は全く海草のワカメに以て沃度の香りのある風味であった。この小屋であしく、寺の山案内人の佐伯某の越中小原節を聞いたが、この人がまた素晴らしい声の持主で一杯きこしめした勢で本場の小原節を歌ってくれたのであった。立山から帰りによく立山温泉に立寄った。この温泉は割に山奥にありながら早くから開けて山小屋と云う感じはなかった。

後立山の小屋

後立山は北アルプスでは、当時登山者は他のコースに比較して少い方であった。五龍の小屋はまだなく、黒菱・唐松・キレット・冷・種池・爺・針木小屋となっていた。これらの小屋はいずれも満員となることは少かった。冷の小屋には八重ちゃん云ふ山の乙女がいた。

この乙女については悲しい思ひ出があった。

それは、この小屋は黒菱からも針木からも中途半ばの所であつて割合に泊り客が少い様であった。だがこの小屋は鹿島槍岳登山の根拠地として冬山の各大学の訓練の中心となっていた。そこで夏期の収入減を冬山で稼ぐ目的で彼女の父が十一月の下旬にこの小屋に登ろうとしたところ新雪の雪崩で遂に帰らぬ人となった。それを探して登った彼女の兄も亦雪崩の爲めに谷深く落ちこんでしまつて、消防団や青年団まで出動して探したが見当らなかつた云うことである。彼女の父では困つてしまつて途方にくれていとき健気にも彼女がこの山小屋の経営を続けることになったのであった。その頃後立山には女の登山者などほとんどなく、山の中に彼女を見出した時は全く元氣百倍と云うところであつた。時は芳紀十八才位であつた。学生など、も

う一と張場行けるところを冷の小屋にテントを張つて夜つひて語り明すと云ふ状態であつた。このことは嘗て写真月報誌に詳報したことがあつた。

この外北アルプスの山小屋で今思い出されるものは、常念小屋のみであつた。當時はどの山小屋にものみは名物であつたが、この小屋のみは物凄く大きなやつが暗いランプの下でも見える程沢山いて眠れなかつた。同じ山系の大滝小屋に九月に登つた時は小屋の番人が誰か何かやる老人で静かに談話を聞いたことを覚えてゐる。

尾瀬の今昔

尾瀬の長蔵小屋は、今では立派になり小屋と云うには当らぬ程大きい、當時は沼尻にあり、今の小屋の前に沼畔に低い小さい小屋が残っているが、あそこで皆寝たものである。長蔵翁が生きていてがんばっていたものである。季節でも今程の混雑はなく至極のんびりしていたものであつた。沼では今の洗場の所で飯粒でいくらでも魚が釣れ、その魚など煮てくれたのしい夕食が出来たものであつた。弥四郎小屋も檜枝小屋も小さく、尾瀬ヶ原の向う至仏岳の麓の山の鼻の小屋など全く原始的であつたが、今よりも遙かに親しみ深く、営利的でなく気持がよかつたものである。昭和二十二年終戦後初めて行った時は

まだこの名残があつたが、その後行つたら立派な建物が立つてもう小屋の感じはがらりと變つていた。これは北アルプスでもどこでも同様である。

二十二年に尾瀬から鬼怒沼を経て八丁の湯に出て、その奥の手白沢温泉に出た。この温泉は戦前出来た小屋としては立派な文化的なもので、東京の人が経営していると聞いたが、露天風呂もあり、うつつうたる森林の中にあつて全く静かでよい小屋だった。裏日光では最もよいところの一つであつたが今は相当混雑しているのではなからうか？

山小屋に望むことは、その環境に合った小屋を造ることを第一にして欲しい。折角の風景が不調和の小屋の爲めに打ちこわれぬようにすべきである。

近年の登山者には山のエチケットを全然心得ていない者が多く、八月の某新聞には二回にわたつてこの記事が出た。一回は長野県の観光課からの投書で濁沢のハイ松がキャンパの爲め切り尽された云う抗議文であり、もう一回は写真入りで荒された状態が出ていた。高山植物も然りで、こう多数の人々が登つて植物採用としては数少品種はたちまち種切れになる恐がある。いくら営林署で禁札を立ててもそんなものを守る人々ではない。これは学校でぜひ注意して採集をやめさせて写真に撮つて採集に代るべきことを提案する。

雑感

佐藤 浄

東京在住全員の御骨折により会報が出されたことは本会今後の発展のため御同様に堪えない次第で御座います。原稿募集や編集に当られる方々の御苦勞は並々ではないと思いますが、今後も永く続けていたゞき度いものです。会報の持つ価値については今更云々するまでもないことでありまして殊に吾々地方会員の受ける恩恵は大きいものがあると思います。今後の発展を切に祈ります。

本会に加入して以来何年になるかはっきりした記憶はありませんが終戦以前のことですから少くとも拾年以上は経過しているわけですから、この間会のために何等貢献するところもなく全く御恥しい次第で御座います。毎年定期的に開催されている展覧会にもなか／＼出品出来ないでおったのですが、今年は東京会員各位の御好意により引伸し万端の作業をやっていたゞきどうやら出品出来たことはまことに有難いことでした、この稿を借りて厚く御祝申上げる次第で御座います。

盛況裡に毎年繰り返されているこの展覧会ではありませうが大体大都市でのみ開かれる閑

係から地方に在る吾々は会員各位の作品に接する機会がなく残念に思っておりましたが、今年は岳連の手で全国を廻るとのことです。今年こそは拝見する機会に恵まれるのではないかと大いに期待しておりました。尤もこのことについては昨年沖田氏の御好意により当盛岡に開催してはとの御知らせをいたゞいたのですが会場その他の都合で開催不能になったことは全く残念なことでした。これについて思うことは会員が一人孤立していることは色々な点で不自由が多く出来れば最少三人はほしいものとつくづく感ずる次第で御座います。青森時代には三浦、笹森の両兄が一緒で何かと都合がよかったのですが、昭和二十一年に小生が岩手に笹森兄は昨年青森県南の田子町に移ってこれで三人が完全に孤立してしまつたわけですがお互互に心淋しいことであり実際の活動に当つてもなんとなく積極性に欠けるのではないかと憶測しているわけですから。会の展覧会にもあまり出品しておらないのもやはり一つの現われと思います。

ころは年末年始の休みと五月のゴールデン・ウィークを利用して古巣である八甲田へ二回に亘り二十日間ばかり行くことにしている外随時二、三日の豫定で近山である八幡平、駒ヶ岳へ出掛けるのが精一杯のところ協会で主催する冬の撮影会にも一度は参加したいと思つておりますが、今年も蔵王、八甲田の通知をいただきましたのでせめて八甲田には是非行くべく腹を決めておりました。ところが、たまたま当場のランチにおける会計監査に出掛けることになり日程の変更がどうしても出来なくなつて断念せざるを得なくなり、はるか快晴の八甲田の山々を望めながら大いに勤めのつらさを歎いたことでした。

委員会報告

昭和三十一年一月十三日 新宿、秋田 議題

本年度展覧会開催の件、年間二回開催の希望で之が会場、期日等の交渉を小合、風見委員に決定する。

撮影会を三月九、十、十一日を八甲田山にて開催と決定して、二月の志賀高原での撮影会は流会となった。

山岳写真集出版の議題提出、之れの研究を内田委員に一任する。

出席者 小合、風見、川崎、船越、内田、南部、沖田の七名 塚本会長は電話で欠席通知有り。議事終了で東京岳聯高橋定昌氏、鈴木利一氏を交へて懇談会を開く。

昭和三十一年四月十六日 直吉そば店 会報編集委員会九時近く迄掛つて一応決定、後は中野委員がまとめる事にした。

来る二十三日の審査会と一所に参集して最後の仕上する事にして散会。

出席者 南部、石場、長谷川、中野、沖田の五名 昭和三十一年四月廿三日 直吉そば店

展覧会出品作品審査会を開く。司会者船越委員を議長に選出して審査に入る。今回の作品

は四季のものとなつて居るが、やはり、冬ものが多かったので、未提出者には夏ものを出品する様督促状を出す事に。今後の展覧会の有り方に就いて検討する。之れ迄は傑作集の感が強がつた為、何んとなくものたりなきが有つた。高い山に集中されたためバラエティーが無かつた。今後は山に関する総ゆるものを取り入れる様視野を広く開いて行く事を決定。今回も以上の線に沿つて作品を決める事に決定して審査に入る。

最終決定を五月八日に決めて散会する。

出席者 塚本、船越、小合、風見、内田、南部、沖田の六名

続いて会報編集委員会を開き最終決定をする。石場、中野氏参加する。

昭和三十一年五月八日 直吉そば店

六月展覧会作品の最終審査会を開く。其の後集まつた作品の選出に、地域別に陳列する事にして、北部は八甲田に始まり南部アルプスに終り、総出品作品選出百〇四点と展覧写真一点を加へ決定する。

出席委員 小合、風見、船越、内田、南部、多川、沖田の七名。

昭和三十一年六月廿五日 直吉直そば店 企画委員会を開く。

一、上越シリーズ、山麓、温泉、風俗、山小屋 係 小合、南部委員

二、牧場、美ヶ原、神津、早月(八ヶ岳)、戸隠、光徳沼、菅平 係 船越、小合委員

三、蜜蜂、鳥々乗鞍山麓 係 風見委員

四、開墾地、八ヶ岳山麓、葦科山麓 係 風見、横田委員

五、山小屋生活、準備から一日の生活、閉鎖(蘆花の山荘) 係 船越委員

六、木樵の生活、南アルプス、上越 係 未定

七、岩場、準備、登攀技術、用具、アンザイレン 係 風見、八木委員

八、白馬山麓、春夏秋冬 係 風見、八木委員

九、パノラマ集 係 全員

十、登山者の百態、雨具 係 内田委員

以上十項目を決定する。

出席者 船越、風見、内田、南部、横田、八木、沖田の七名

昭和三十一年八月廿四日 直吉そば店

十一月十四日映画上映フィルム決定会を開く。

酒井氏の氷の宮殿雲龍峽、中野嶺陽氏の立山連峯此れは後日朝日連峯と変更有つた。

福原氏の一九五六年学生スキー選手権大会団体スキー大会、今泉氏の東北の行事、塚本会長は岩氷の鳥海。然し此れは川崎氏交渉で決定する事にして散会する。

出席者 小合、船越、内田、川崎、南部、沖田の七名。

月例集会報告

昭和三十一年一月十八日 直吉そば店
会長の年頭の辞から始まり、撮影会の件は先
の委員会決定を見た事を報告、念の為の出席
会員の賛否を求める、二月志賀高原の撮影会
は中止となり、三月八、九、十、十一日の八
甲田山撮影会には多数賛成者有って決定し、委
員を風見、小合氏と決定する。

本年度展覧会は六月の写真の日を入れた頃、
夏山展を小西六ギラリーで開く事の報告有り
山形県主催二月二十五、二十六日の蔵王での
撮影会はさくらフィルム後援で行はれるので
会員多数之れに参加し、側面から援助する事
に決定する。

年報的会報を出す事にして此れを南部委員に
一任の件を決定する
内田委員より会員浅石氏の野沢温泉スキー場で
足骨打の報告有り、後日金一封と見舞状を出
す議事終って、イタリヤのスキー映画を風見
委員の御骨折りで上映され鑑賞して散会す
る。

出席者 三十二名。
昭和三十一年二月八日 直吉そば店
取立る程の議題無く三月の八用田の撮影会な
どの話と雑談で終る。

福原氏の最近作奈良と白馬岳の上映を鑑賞す
る。

昭和三十一年三月八日 直吉そば店
八甲田撮影会の打合せをなす可き所風見委員
昨夜現地出発の為欠席、打合せを省略する
中部日本新聞から写真展の申込みの件を沖田
より報告。

六月の写真展の件、小合氏より其の後の交渉
で期日決定に至らずとの報告有り。
塚本会長よりスポーツ芸術作品展が本年七月
に有るので、詳細は追って後日にするが、会
員多数の参加を希望するとの発言有り。

出席者 二十三名。
昭和三十一年四月十二日 直吉そば店
小西六秋山清氏に頼って最近の感光材料、特
にフィルムに就いての講演を聞く、なか／＼
の盛会であった。

終って六月展覧会の件に就いて、種々と打合
せをして散会する。出席者 卅四名。

昭和三十一年五月十日 直吉そば店
六月展覧会作品陳列方法に就いて、又出品作
品の選出に就いても重複の無い様、同じ山で
も角度の違ったものを選出、展覧会作品の選
出方法を船越委員より説明有り。
別室で会長に出品作品を一応点検を依頼、三
四の選をやった後二三の補充で作品の決定を
見る。補充に就いては風見氏に依頼する。作

品のフィルム出揃いを得て之れが引渡しを
八木氏に依頼有って何れも快諾する。

高橋昭氏作品の団体競技一九五六のスキー映
画を観賞する。出席者 卅三名
昭和三十一年六月十四日 銀座グリル
展覧会に就いて沖田より作品の遅れない様、
期日迄出品する様要望有り。

展覧会開期中各自が自発的に会場に詰めて貰
ひ度い、自分等の展覧会は自分等の責任を以
って最後迄協力す可き事等、今後の展覧会の
有り方に注意と要望有り。

今冬のスキー展が決定した事を発表有り。
来年度展覧会に対して撮影会の計画委員の選
出、小合、風見、船越、内田、南部、横田、
八木、沖田の八名を決定して散会。

出席者 卅二名。
昭和三十一年七月十二日 朝日クラブ
展覧会々々長賞の授与、南部、横田、鈴木徳、
小尾、宮崎の五氏へ。

撮影企画委員で決定した事項の騰写印刷を配
布し、其の説明を南部企画委員より有り、終
って質疑応答有って散会。出席者二十四名
昭和三十一年八月の集会は休会とする。

昭和三十一年九月十三日 朝日クラブ
今日は雨にも拘らず続々参集。十一月十四日
映画会開催決定を報告。
塚本会長の選層祝ひに関して発言、鈴木氏よ

り委員附託と決定。
十一月の映画会上映する福原氏の『一九五六
年学生選手権大会、国体スキー大会』及塚本
会長の『氷雪の鳥海山』の試写有って散会す
る。出席者 卅四名。

展覧会

昭和三十一年度春展を六月五日―十日迄銀座小
西六ギラリーに開く。

会場当番

四日 作品陳列する。

五日 風見、小合、佐藤、永田、八木、横田
浅石。

六日 中野、内田、平野、小合、佐藤、飯田
白井、横山、新城、沖田。

七日 横田、南部、新城。

八日 石場、田中、白井、横山、平野、沖田
猪山、三木、長谷川、鈴木徳、小尾、

九日 杉山、沖田。

十日 中野、杉山、小合、飯田、石場、南部
内田、田中、小尾最終日で以上九名で
写真全部取外す。

猶期間中〇時三十分、二時、三時三十分、五
時の四回スライドを上映する。入場者は毎日

30年度会計報告

第四回映画会		協会分	
収入の部		収入の部	
切符売上及寄附	147,415	会費	45,100
支出の部		催物利	114,647
会場費	32,000	寄附	6,000
会場設備使用料	3,630	雑収入	9,700
入場税	15,960	前年繰越計	32,670
諸印刷費	13,600	合	208,117
当日費	12,600	支出の部	
諸交通費	21,820	交、通信費	16,677
小計	99,610	謝礼、交際費	14,650
差引残金	47,805	パッチ製作費	13,500
以上の通り明治生命、山と溪谷社、東京		印刷費	17,000
放映後援の元、特選の御協力に依り多大		文房用品	1,065
の好成绩の報告の出来た事を厚く御礼申		運送費及雑費	9,555
上ます。		合	72,447
今後共協会発展の爲め一層の御協力を希		差引残金翌年繰越	135,670
って以上の如く相違無く御報告申上ま		以上の通り相違無く御報告申上ます。	
す。猶、残金は協金資金へ繰入れれます。		昭和31年1月10日	
以上		以 上	
常任委員会計委員		川崎吉藏	
"		"	
"		沖田虎吉	
会計係 沖田虎吉		"	

日本山岳写真協会会則

- 第一章 総 則
- 第一条 本会は日本山岳写真協会と称す
- 第二条 本会の事務所は中央区銀座西四ノ一山映商会内に置く
- 第三条 本会は山岳写真及山岳映画の作家を以て組織す
- 第四条 本会は山岳写真並びに山岳映画技術の研究向上

と會員相互の親睦を計るを以て目的とす
第五條 本会は前條の目的達成の爲め下記の事業を行う
一、山岳への撮影行
二、四季の山岳写真展覧會
三、山岳映画會、講演會、講習會出版等を行う
四、本会は毎月例集會を開く
五、必要と認めたる時は臨時集會、委員會を開く
六、其の他本会の目的達成の爲め必要な事業を行う

第六條 會員及準會員

一、準會員は會員多數の推薦を要し、協會連済の議決權を有しない。會員は準會員中より委員會の承認により選定す
二、本会所定のバッヂは本會員のみに貸与する（準會員はこれに準ず）

第二章 役員

第七條 本会は左の役員を置く

- 一、會長 一名
- 二、副會長 二名
- 三、委員 若干名
- 四、常任委員 若干名（委員中より選定）
- 五、會計委員 二名（〃）

第八條 本会の役員は會員中より互選に依つて之を定め

第九條 本会役員は使命

- 一、會長は協會を代表し會務を之統轄する
- 二、副會長は會長を補佐し會長事故有る時はこれを代理する
- 三、委員は本会の事業達成に伴う總ての事業を担当する
- 四、常任委員は本会の應務一般の事務及協會事業の企画を担当する
- 五、會計委員は本会の經理に關する一切の事務を担当する

第十條 本協會の役員は非任を妨げず

第十一條 本協會の役員は任期は一年とする

第三章 會 費

第十二條 本会の収入は左の通りとする

- 一、會 費
 - 二、入 會 費
 - 三、寄 附 金
 - 四、其の他の収入金
- 第十三條 本会の會計年度は毎年一月一日に始まり十二月三十一日として會計委員は決算報告をなすものとする

第十四條 會 費

- 一、東京會員 一カ年 六百円
- 二、〃 準會員 一カ年 六百円
- 三、地方會員 一カ年 三百円
- 四、〃 準會員 一カ年 三百円
- 五、入 會 費 千 円

第十五條 會員準會員は會費未納が一カ年に達する時は退會

第十六條 會員準會員は左の行為の有一つした時除名する

- 一、協會に損害を及ぼした時
- 二、協會の名譽を毀損した時
- 三、協會の集會、館事に不参加の多い者
- 四、其の他協會發展を障害に類する一切の行為を行つた者

第四章 附 則

第十七條 本協會間の變更は會員の三分ノ二以上の同意を必要とする

第十八條 東京會員及東京準會員とは集會に参加出来得る地域の會員及準會員を言ひ其の他の會員を地方會員と称す

第十九條 會計年度末に於て役員の選挙を行う

第二十條 本会期は昭和三十年一月一日より実施する
昭和二十九年十二月十日

編集後記

會報第二号編集に當り岩科氏より特別寄稿のあった事は有難い事でした。會員の原稿が締切りに大半間に合はず編集寸前に集った為十六頁に纏める都合上一部の會員の原稿を次号に廻す事になりました。あしからず御了承下さい。

次号は協會の特色のある様な原稿を奮つて御寄稿下さる様御願ひします。（南部記）

會報係 石場 清三

横田 裕介

中野 慶一

新城 新一郎

長谷川 吉夫

南部 英夫

會 報 第 二 号

昭和廿一年十一月八日 発行

編 集 者 南部 英夫
発 行 者 沖田 虎吉

事 務 所

東京都中央区銀座西四ノ一 山陽商會内

日 本 山 岳 写 真 協 會

電話(56)三〇七三